

編 集 後 記

早期胃癌研究会を母胎に昨年 4 月に第 1 号が発刊された本誌も読者の暖かい御援助によって発行部数も次第にふえ、ここに新年号、第 2 巻 1 号をお送りするに至りました。昨年は国際内視鏡学会、国際消化器病学会、国際癌学会のいずれもが驚異的な成功裡に終わりましたが、そのために普段の研究がやや停滞した感がなきにしもありません。今年こそはこれら外国の学者よりうけた刺激をもとにして一層飛躍の年でありたいと思います。そしてこの私達の研究結果の一部でも英文に翻訳し、国際的な真価を問える英文雑誌を発行したいとする意見が編集会議で真剣に討議されています。いずれにしろ本誌が Japanese Journal of Gastroenterology として、象牙の塔の中の学問として遊離することなく、名実ともに本邦の第一線の先生方にも密着し、かつ、国際的にも胃腸病の中心的役割を果たせるよう努力したいと思います。

まず新春の第 1 号は、最近とみに話題の中心になって来ました十二指腸潰瘍をとりあげ、その病理から臨床までを斯界の権威である村上・山口・並木先生の綜説で飾ることになりました。次号の第 2 編にひき続いて一応、現在の十二指腸潰瘍の最尖端の工作在紹介されることと思います。6 回にわたって掲載された座談会「胃潰瘍」は本号をもって終了しますが、技術解説として高木先生の「胃生検」が始まります。かなり高度の技術を要求されますが、早期胃癌の鑑別診断に今や欠くことが出来なくなりました。そしてこのお家芸を世界の学者に披露し、絶讃を博した国際内視鏡学会および消化器病学会の印象についてまず高橋先生の報告からお送りします。

< 川 井 啓 市 >

< 編 集 > 早 期 胃 癌 研 究 会